

---

# The Cream ~BLEACH~

ヴォックス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The C r e a m ~ B L E A C H ~

### 【NZコード】

N1167F

### 【作者名】 ヴォックス

### 【あらすじ】

三番隊第三席、熙漸中心のストーリー。現世の死神の連續負傷事件の調査の為熙漸が向かったのは町とは名ばかりのド田舎だった……熙漸の記念すべき一作目。

## 登場人物紹介

ヒミネ  
灯峰熙漸

男。三番隊第三席。斬魄刀は雷牙。薄いクリーム色の髪。勝里と霧穂は親友。縛道には長けているが破道はからつきし。下級貴族出身でイヅルとは幼なじみ。

アサバチ  
麻鉢勝里

男。六番隊第四席。斬魄刀は亀楼丸。靈術院時代に同チームだった為に熙漸と霧穂と仲が良い。鬼道に長ける。流魂街出身。

オリモト  
折本霧穂

女。十番隊第三席。斬魄刀は豪割丸。熙漸と勝里と仲が良い。勝里とは幼なじみ。鬼道は全く使えない。流魂街出身。

## 第一話 現世へ

一面の曇天。

灯峰熙漸の目に飛び込んできたのはそれだつた。一瞬思考が遅れる。  
戸魂界は晴天である事が多いで、灰色の空を見る事はあまり無い。

そうだ……現世に来たんだつた……

寝転がっていた民家の屋根から体を起こし、頭を振る。時間と共に記憶が鮮明に戻つてくる。

「現世っすか?」

「ああ

「済まない、と謝りながら上司である吉良副隊長が頭を下げる。

「そんな、止して下さいよ」

「僕もどうかと思つんだけどね……市丸隊長の指示だから……済まない」

俺は頭を下げないでくれ、と言つたつもりだったのだが、駐在任務に不服だ、と受け取られたらしい。まあ不服でないのかと聞かれれば否定は出来ないのだが。三席に成つてからそんな 不謹慎だが簡単な任務に就くとは思わなかつた。その事を率直に副隊長に尋ねた。

「正直三席の仕事じやないっすよね?」

熙漸の問いに吉良が顔を曇らせる。

「先週、現世の駐在任務に就いていた我が隊の隊員が死亡したのは知つているだろ?」「

熙漸が頷く。死神を負かす程の虚が現世に現れたといつ事に驚いたのを覚えている。

「死亡した彼だけでない。その地に就いた隊員が立て続けに3名負傷している。これは尋常ではない」

「初耳だつた。確かにそれはまずい、といつかやばい。」

「そこで市丸隊長は君を選抜したんだ」

「何故俺なんすか？四席の河城とかでも良いのでは？」

真顔だつた吉良が、そこで初めて笑みを見せた。苦々しい、というもののだつたが。

「僕も市丸隊長に聞いたんだよ。そしたら、」

『イヅルには隊務手伝つてもらわなアカンし、まあ席高ん中で一番の三席を向かわせたらH工やろ？えーっと……』

『灯峰熙漸ですか？』

『そうそう。イヅル灯峰君と仲H工んやろ？イヅルから言つていてえな』

『はあ……分かりました』

なんて安直な……でも正しい判断だ。市丸隊長はいつも出鱈田に見えて正確な判断を下す。そこに惹かれる隊員は少なくない……俺が良い例だ。

「駐在任務と言つても長期間という訳ではない。強力な虚の発生に關しての調査を兼ねての任務だ」

「要は俺がその虚をぶつ倒せばいいんすね？」

『冗談交じりに聞いたつもりだつたが、副隊長は顔をしかめた。』

「そうじゃない。僕も君が負けるとは思つていないが、隊員を殺した実力は本物だ。くれぐれも侮らないよ」

“君”か。副隊長の何気ない言葉に軽くショックを受ける。あの頃とは違うとこいつ事か。悔しさと悲しさを“まかす為、無意識に下唇を噛む。

「分かつてますよ」

自分の刺のある声に自分自身で驚く。慌てて、

「いつからですか?」と付け足す。

「出来れば今からでも頼む。早ければ早い程良い」

「分かりました。どうせヒマしてたもん。場所は?」

「耶広町を中心とした半径2霊里だ」

「2霊里? 広くないですか?」

「まあ理由は行けば分かるさ」

「そうすか。では早速行ってきます」

壁に立て掛けていた熙漸の斬魄刀、雷牙を手にとり腰にさす。

「灯峰君!」

後ろを向きかけた時、“懐かしい”吉良の言葉が聞こえた。

「気をつけて」

「…やつと言つてくれたな、イヅル」

「ああ、気をつけて」

「うが! それは分かつたつてのー他に無いのかよ?」

「他に?」

「まあいいや、イヅルは昔から心配性だからな。じゃあ行つてくれる

「気をつけて」

歩き出した熙漸は手をヒラヒラと振りながら、のんびりとした声を出す。

「3回目~」

イヅルとは死神に成る前からの付き合いだ。元々吉良家と灯峰家は貴族同士交流があつたらしい。まあそんな理由もあつてか、幼い頃から年の近いイヅルとはよく遊んだ。

死神になりイヅルと同じ三番隊になつたのは完全に偶然だったが、他の隊員の手前、律義なイヅルは“副隊長と席官”として話す時は灯峰君とは話さなかつた。さつきの様に個人的な会話の時には“灯峰君”と呼んでくれるのだが。

## 第一話 開門処理

「ん、熙漸どつか行くのか?」

三番隊の穿外門に向かう途中、麻鉢勝里が声をかけてきた。  
麻鉢勝里。六番隊第四席。靈術院時代にチームを組んでいたので、仲が良い。休みの時にはよく飲みに行くのだが。

「今非番じゃねえだろ? なんで勝里が三番隊隊舎にいんだよ」  
勝里が眉を上げる。

「んだよ、俺が居ちゃ悪いのとかよ」

「悪い。どうせまたサボつてんだろ?」

「失礼な。これだよ」

勝里が小さな紙をヒラヒラと振る。

「何だ?」

「阿散井さんから吉良さんに伝言だとよ。ホラ、あの二人仲良いだろ?」

イヅルと阿散井副隊長が親友である事はイヅルから度々聞いた事が  
ある。

「何書いてんだ?」

勝里が心底呆れた様な声を出す。

「熙漸、デリカシー無えなあ。人の手紙見るかよ」

「お前にデリカシー無いとか言われたくないな」

「んだとオ! ? .....で、どつか行くのか?」

「現世だよ、現世。聞かれる前に言つとくけど連續負傷事件の調査  
だ」

「まあ理由なんてどーだつて良いけどな。現世つてのはビックリだ  
な。義骸は用意したのか?」

「義骸? 要らないだろ?」

「いやー意外と良いもんだぜ? 一回は入るべきだ」

「俺はいいよ、忠告どいつも。じゃ」

熙漸が片手を上げると、勝里もそれに応じた。

「じゃあな」

「灯峰熙漸殿、穿界門の開門処理は終了済みです」

隊舎前の穿界門に着くと、既に処理は行われていた。おそらく吉良副隊長が先に指示を出していたのだろう。

よオし……久々の実戦だ……腕がなるぜ……

地獄蝶を一匹、世話係から受け取る。

「穿界門は耶広町の中心部へと通じています。駐在地は到着する場所からちよつと半径2霊里です」

「了解」

開門処理に当たった鬼道衆の話を頭に叩き込む。

「さて……行くか……」

## 第三話 抜刀

そして時は屋根で目覚めた頃に戻る。

現世に来た後はこれと言った事も無く一夜が明けた。整を4人魂葬し、普通の虚を二匹切つた程度。勿論、隊員を殺した様なレベルの虚は現れなかつた。

半径2靈里という広さも、耶広町に着くと直ぐに分かつた。辺りには民家と田畠ぐらいしか目につかない程の田舎だったのだ。つまり、人口がかなり少ない。半径2靈里でも、普通の町の半径1靈里より人数は少ないだろう。幸い俺は瞬歩を人並み以上は習得していたので、広さはあまり問題ではなかつた。

何か違和感を挙げるとすれば、一つ強く小さな魄動を感じた事が、強いのに小さい。

「 そうだつた！」

完全に頭から抜け落ちていた為、思わず大声が出る。その魄魄を探す事に決めていたんだった。

まあ考えれば半径2靈里内には死神は俺しか居ねえんだから、大声を出しても誰にも分からぬわけだ。極論を言えばここで全裸になつても分からぬ。

「 ……はあ」

そこまで考えたところで恐ろしく空しく退屈である事に気付いた。今なら義骸を用意しろと言つてた勝利の考えも分かる。初めて現世に来た時は先輩に同行してもらつたので、会話や鍛練の相手には困らなかつた。

先輩、か。

「…」

虚か！しかも……

靈圧の操作はあまり上手くない為、伝靈神機で虛の場所を確認する。「またかよ……」

昨日の一匹といふ今日の一匹とここ、三匹とも近い場所に出ている。まあ考える必要は無い。

「あつちだな」

足に力を込め、一気に踏み出す。

瞬歩。死神の高等歩法の一つ。まあ堅いことを抜きにすれば、高速移動みたいなもんだ。

景色が流れて行き、やがて視界に白い異様な姿が飛び込んでくる。虚だ。その外見は多種多様、とでも言つておこつか。

斬魄刀を抜き放ち、瞬歩の勢いを乗せる様に斬り付ける。

ガン！

「くつ！」

弾かれたか。昨日の一匹はこれで倒せたんだが。

## 第四話 斬魄刀解放

よく見ればその虚はタコの様に多い腕があつた。タコとの違いは、その腕の先に指3本の掌があり、丸い体の中央から筋肉質に発達した脚が生えている事か。キモい事この上無い。

こちらの存在に気付いた虚が横に長く裂けた口を開いた。

「貴様、死神ダナ？」

「その通りだ」

答えながら内心で舌打ちする。厄介だ。

「魂」とか

「殺す」とか

「喰う」程度の言語なら良い（良いのか？）のだが、それ以上の言語を使う奴は少なからず知能を備えている事が多い。ましてや「死神」を知ってるなんて。虚に成り立てとは思えない。

「虚圈から来たのか？」

「ソウダガ？ソレデ？」

会話に応じるとは益々質が悪い。長話は無用だ。別にこいつが死神を殺した虚つていう訳でもあるまい。

「いや、何も」

ヒュツ

瞬歩で相手の眼前に飛び出す。敵の能力も分からぬまま戦うのは良くないと、とある人物から言われた事があるが問題無い。相手はあまり動きが速くないと踏んだ。

ズバン！

顔面に向かつて刀を振つたが、前に出て来た数多の触手に阻まれた。

「クソッ」

悪態を尽きながら一度距離をとる。

「ソンナモノ力？死神」

「このタコ野郎め」

切り裂いた触手が再生を始めるのを見て更に悪態を尽く。

あの腕に邪魔されずに顔面を叩き斬れば良いんだな……よし……

「縛道の一！」

「鬼道力？」

「一々五月蠅えんだよ！」

「塞！」

バンッ

乾いた音と共に虚の四肢の自由が奪われた。……タコ虚の四肢だけが。タコの腕の一本だけが後ろに縛られているのは何とも奇妙な光景だ。

「何力シタ力？」

「クソッ、見てろよ……縛道の六十一……」

ダンッ

塞を振り払つた虚が強靭な脚で一気に間合いを詰める。何本もの太い触手が熙漸に向かつて伸びた。

「いつ！？」

「馬鹿メ！」

先端に爪を纏つた触手が熙漸の腕を掠めた。

「つーてんめ……」

後ろに飛び、敵と距離を置く。そいつは愉快そうに田を細めていた。

「コンナモノ力？死神」

「……上等じやねーか」

考えてみれば最初に抜刀斬りが弾かれた時点でそうするべきだった。  
その前に、気になっていた事を一つ尋ねてみる。

「どうしてこの場所に出た？魂魄が喰いたけりや、もつと人のいる  
所に出ればいいだう？」

「コノ辺リニ靈子ノ濃イ魂魄ヲ感ジタカラダ。ソレダケ聞ケレバ十  
分力？」

「ああ、十分だ」

「ナラバ……死ネ！！」

虚が全ての触手を標的に向かって繰り出した。それらが熙漸に届こ  
うかと言つ時。熙漸は解合を口にした。

「咬み碎け！雷牙！-！」

## 第五話 雷撃纏いし刃

「何ダ！？」

伸びした触手が焦げた様な臭いを放ちながら四散したのを見、虚が叫ぶ。

「問答はもう十分だと呟つた筈だが？」

ガンッ！

刹那、雷撃を纏つた二つの刃が虚の頭を貫いた。

「アアアアアアアア！」

虚が断末魔と共に消えていくのを見届けた後、愛刀 雷牙を眺める。

鐔から伸びる二つの刀身。そのどちらからも僅かに、ジジジ…という帶電する音が聞こえる。

刃についていた虚の濁つた血を振り落とし、刀を納める。

全く、最初から解放してりや良かつたよ。六杖光牢使いかけたじゃねーか。

「さてと……じゃ、探すか

さつきの奴も狙っていると言つていた。恐らく昨日の一匹もそうだろ。尚更早く見つけねーと。

俺は靈圧操作はあまり上手くないが、その魄動が強い為大体の場所は分かつた。

「近いな」

辺りを見回し、人の姿を探す。あまり高い場所にいても見つからないので、取り敢えず地面に足を着ける。この辺りは畠が広がっていた。人影は見当たらない。

どうから探すかな……

「あらあら、こないな所にこない若い子が来ようなんて珍しいね。今取れたての野菜があるけん、上がつて行きさー」

畠から上がつて来て、野菜を入れた籠を背負つたお婆さんが熙漸の背をぱすっと叩いた。そのお婆さんは熙漸の前に出ると、「あらあら、よう見ると中々の色男さね。さて、来なさい」

「是非ー。」

その籠に入つていた水々しい野菜に惹かれ、素直に返事をする。ちようど腹も減つていた。

……いや待て。

「ばつ、婆さん、俺が見えんのか！？」

我ながら間抜けな質問だと思いつつ尋ねる。

「まだ目も耳も、いかれてはおらんよ」

あまりにもサラッとした答えに拍子抜けした。まあ良いか、とにかく見つかっただだし。婆さんに着いて行きながら、にしても、と熙漸は思う。

これだけ強い靈力を持つていて、この歳まで生きてこれたのは運が良い。靈力は生れつき持つてている事が多い為、靈力を持つ人間は長生きする事は少ない。理由は言わずもがな、虚に狙われるからだ。

「あ！」

婆さんに俺が見えて、俺は靈体だ。野菜食えねえじゃねえか！  
婆さんは俺を靈体、ましてや死神とは思っていない。

婆さんが後ろを振り向き、惱む熙漸に話し掛ける。

「若いのに着物なんて珍しいねえ。祭りにでも行くのかい？」

「まあ……そんなどころだよ」

## 第六話 現れた巨影

「……なつー?」

突如現れた巨大な靈圧に驚愕する。

嘘だろ……何だこの馬鹿デカい靈圧は……ただの虚じやねえ……何処だ?

振り向いた熙漸の眼に二体の巨大な虚の姿が映った。

「嘘だろ……」

ほんの数秒前まではこんな奴の気配は微塵も感じられなかつた。

「どうかしたのかい?」

「婆さん、このまま家に帰つてくれ。そして絶対家から動くな」

虚から口を離さずに答える。

「?まあいいけどね。あんたは?」

「俺は……祭りに行つてくる」

この場に似合わない軽い冗談を叩きながら斬魄刀を抜き放つ。

「行つてくれ!早く!」

熙漸の叫び声に虚が気付いた。出来る限り婆さんから注意を離す為、虚の前に飛び出す。

「咬み碎け、雷牙!」

解放し、二匹の虚の様子を見る。

潰れた様な顔にずんぐりとした胸。腕の先は鋭い爪に成つてゐる。何より、発せられる靈圧が桁違つた。

伝令神機を取り出し、上司に連絡をとる。「即良副隊長、非常にヤバイっす

「灯峰君?どうした!?」

「ヤバイっす。以上」

正確に報告した所でヤバイ状況である事には変わりない。あの心配性には少し適当に言った方が効果観面だ。我ながら性格が悪いと思う。連絡を終え、一匹の虚に向き直る。

どうする？一匹を縛道で押さえ込んで戦うか？いや、無理だ。押さえ込めるのは数秒だ……その間に倒すのは不可能に近い。

「徹底的に牽制か」

一匹が同時に飛び掛かって来た。速くは無いが一匹は厄介だ。

「縛道の六十一！六杖光牢！」

光の帯で左の一匹を拘束する。そのまま襲い掛かる虚の一撃を避け、左腕を斬り付ける。灰色の太い腕に一本の深い傷痕が刻まれる。

「ググツ」

虚は軽く呻いたが、続けて右腕で再び攻撃を繰り出してきた。

「ちつ！」

巨大な爪を刀で防ごうとしたが、あまりの怪力に数メートル吹き飛ばされた。幸い六杖光牢は未だ維持出来る。だが、それも長くは持たない。

……イヅルを信じるか……

一本の刀身が一本へと戻っていく。斬魄刀の解放状態を解いたのだ。始解とは言え、靈力を消費する事には変わりない。六杖光牢の維持に照準を絞る。もう一匹とは解放せずに戦うしかない。

なら……

拘束していた虚の縛道を解く。

「君臨者よ！」

詠唱破棄では拘束時間は知れている。持久戦に持ち込むと決めたからには詠唱を唱えて再び強力な六杖光牢を放つ方が良い。それまでは……気合いで凌ぐしかないか。

「……血肉の仮面……」

束縛されていた方の虚が熙漸目掛け右腕を振るう。それを避け右肩を斬り付けたが、傷は浅かつた。何も無かつたかの如くこちらを見ると、二撃目を加えてきた。

やっぱ解放しねえとまともには戦えねえか。

「……人の名を冠す者よ……」

入れ代わりに、左腕に二筋の傷のある虚が右腕を振りかざし突っ込んで来る。左腕は力が入ってないかの様にダラリと垂れている。雷撃を纏つた刃が筋肉まで達せばある程度は麻痺させられる。雷牙の一撃は良く効いているらしい。不幸中の幸いってヤツか。

心なしか恨みの籠つた様に見える右腕の一撃を避け、二体から距離を置く。

「……糸車の間隙……」

隙を与えまいとするかの様に、一匹が立て続けに襲い掛かつて来る。

クソッ……来やがったか……間に合えつ……

「……光もて此を六に別つ……縛道の六十一！」

ヒュツ

腕に傷のある虚の姿が搔き消えた。

なつー? 何処……いや……先ずはこいつからだ!

残つた方の虚へ意識を集中させる。熙漸の右の人差し指と中指に光  
が灯る。

「六杖光牢! !」

## 第七話 負傷と打開策

ガン！！

六つの光の帯が虚の体に突き刺さった。のっぺりとした顔からは表情が読み取れないが、暫くは抜け出る事は無理だろ？

「さて、問題はもう一匹だ。何処に 」

背に迫る靈圧を感じた。咄嗟に振り向いた時には、遅かった。鮮血。

「ぐつ！」

痛みの走った左肩を押さえる。黒い装束が見る間に朱に染まっている。ドクドクと鼓動がやけに『力』かく聞こえる。

ヤベエ……いや、大丈夫だ、大丈夫だ……

頭の中に入り込もうとした絶望を強引に振り払い、右爪に付いた血を嘗めていた虚を視界に入れ。皮肉にも、俺もその虚も左腕がダラリと垂れていた。互いの攻撃によって。

右腕の赤を殆ど口の中へ入れた所で、そいつはこっちに再び目を向ける。初めてまともに目を合わせたが、その奥には怪しげな光が灯っていた。なまじ血を嘗めたせいで本能が掻き立てられたのかもしれない。

そんなくだらない事を考えていても、左肩から流れる血は止まる気配が無かつた。いつまでも右手で傷を押さえている訳にはいかない。ほんの数秒でも、止血の時間が欲しかった。

俺とあいつとの間には不気味な沈黙があつた。相手の出方を伺っているらしい。『鈍くて単純』という第一印象は撤回だ。『速くて思慮深い』という方が適切だろう。つまり、距離を置いて止血、という手段は選べない。なら……

「縛道の一、塞！」

熙漸が指を相手に向けると同時に巨大な腕が背へと回り、縛られる。最低限の時間さえ確保出来れば良かつた。素早く左腕の布を裂き、歯と右手を使って傷口に布を巻き付け、きつく縛る。結ぶ時に呻き声を漏らしたが、流血は一先ず止まつた様だった。

軽く安堵の溜め息を尽きながら、未だ腕が後ろに回っていた虚の塞を解く。勿論親切心などでは無く、少しの靈力も惜しかつたからだ。

塞であれだけ拘束されていたのであれば、六杖光牢なら……いや……

沸いて来た僅かな希望を即座に切り捨てる。そんなものは希望でも何でもない。ただの“逃げ道”だ。第一、今六杖光牢を使っている虚と塞をかけた虚が同じ靈圧である保証など無い。ただ単に左腕の怪我で靈力を削られているからかもしれないのだ。こんな状況で甘い考えを抱く意味は無い。

右腕を大きく振りかざし、虚がこちらへ跳んで来る。巨大な腕は振り回すだけで十分に攻撃と成るが、隙はデカい。難無くそれを避け、爪を斬り付けたが、弾かれた。

「クソッ！」

爪部分は腕より堅いらしい。かといって腕は太い。爪を切り落とせれば最良なのだが、それは出来そうにない。

六杖光牢が未だ維持出来ている事を横目で確認しながら策を練る。

瞬歩も解放も鬼道も極力避けたい……どうする？……

そこまで考えた所で、呆れると同時に微笑が浮かぶ。

欲張りだな、俺は。そんな状態で勝てる訳がない。イヅル信じる  
と決めた時に、勝利は捨てた筈だ。それなら、凌ぐしかない。剣を  
振る必要がどこにある？

『あるだろ』

耳元で、頭の中で、右手に握りしめるモノの中で、声が響く。

「何故だ？」

『仲間を待つのは勝手だが、お前は仲間信じてはいけない

「……」

『自分自身を信じられない者に、他の存在を信じる資格はない』

『……そんな事分かつてゐるさ。けど』

『“そうする他無い”とは言わせんぞ』

熙漸が苦々しい表情になる。

俺の心を分かつていてるくせに先に釘を打つてくるとは嫌な奴だ。  
『単純な事だ』

右手の中の剣がひとりでに上がり、今にも襲い掛かりそうな虚に切  
つ先を向ける。

『倒せば良い』

『随分簡単に言つてくれるな』

『自分を信じられないなら、我を信じろ。我はお前自身であり、お  
前自身の力だ。勝てないとは言わせん』

『……もう一匹はどうすんだ？』

『縛道が効いている間に一匹を倒せば良いだろう』

『……口が達者だな』

苦笑しながら諦めた様に溜め息をつき、“そのモノ”の名を叫ぶ。

「咬み砕け！雷牙！！」

## 第八話 駆け付けた救援

ダン！

一気に瞬歩で間合いを詰め、右腕を切り裂く。

「ガアアアツ！」

血飛沫を上げる右腕を無茶苦茶に振り回し、虚が悲鳴を発する。そんな虚を冷めた目で見ながら、剣先に雷を集中させる。それはバリバリという音が鳴る程に量を増し、二つの刃の間に夥しい電気が放電する。

「刃雷！」

刃の描いた軌跡がそのまま雷の形と成り、虚の体に生々しい傷を刻む。

「グ……」

よろめきかけた体を立て直し、虚が口を開く。虚の靈圧が高まって行く。

なんだ！？虚閃の類か！？

「ガアツ！」

莫大な量の靈圧が虚の口から放たれる。

「く……つ……」

刀でそれを受け止め様としたが、ジリジリと押されていく。片手じや……防ぎきれねえつ……

吹き飛ばされた。

「クソツッ！」

刀を持つた手で空気中の靈子を固め、受け身を取る。片手を着いたまま前を向いた熙漸の目に、迫る巨大な爪が映った。

「つー！」

咄嗟に剣を体の前に構え、それを受け止める。

ガガガガツ！

僅かに刀身を逸らし、爪を後ろに流す。右腕が伸びきった虚には大きな隙が出来た。

踏み込み距離を詰め、虚の顔に雷牙を振り下ろした。勝利を確信した、刹那。

ドン！

腹に鈍い衝撃が走る。

「がつ！」

気が付くと、俺の体は吹き飛んでいた。空中で反転し、地と垂直に足を着く。

クソッ……六杖光牢が解けたか……最悪だ……

虚の爪が襲い来る。軽いデジャヴを感じる。違う所は両腕が無傷である事か。

爪を防ごうと刀を構えると、その姿が消えた。

「なつー？」

その奥から、両腕に傷を負つた虚が虚閃を放つのが見えた。

「ぐつー」

放された靈圧を刀で防ぎながら、顔だけ振り向く。そこには迫る巨爪があつた。

やべえつ！

ガン！！

「ふーっ、危なっかしーなお前は」

虚の一撃を巨大な剣で防いだ黒髪の男の姿があつた。

「！勝里……！？」

「灯峰君！」

虚の頭を斬り裂いた吉良が呼び掛ける。

「イヅル！」

「遅れて済まない！」

「……ははっ……また『済まない』、か……」

安堵と共に急速に意識が薄れて行つた。

「ん……イテツ！」

目が覚めると、左肩の痛みに声が出た。突然の声に部屋の 民家の小さな家で、中央には囲炉裏があつた 数人が振り向いた。

イヅル、勝里、霧穂、松本副隊長。皆義骸に入つていた。……え？

「霧穂！？」と松本副隊長が何故？」

霧穂と呼ばれた赤髪の女性が口を尖らせる。

「なんで私には驚くのよ」

「霧穂だけじゃなくて松本副隊長にも驚いてる」

「えー、なんで吉良は『イヅル』で私は『松本副隊長』なのよ？」

あんたの『なんで』はそこか！？

「イヅルは幼馴染みなんですよ」

「あら、初耳よ。そうなの？」

乱菊がイヅルに尋ねる。

「まあね。灯峰君、傷は大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ。ところで、ここはどこだ？」

「おや、目が覚めた様だね。具合はもう良いのかい？」

扉を開けて、野菜籠を背負つた例の婆さんが入つて來た。

「婆さん！無事だったのか？」

「私はいつも健康体だよ」

「で、ここはどこなんだ？」

「熙漸、お前アホか？」

勝里が心底呆れた様に言つ。

「え？」

もう一度家中を見回す。中央に団炉裏。他には質素な台所や野菜があるぐらいだ。流魂街にありそうな家だ。

「俺の知つている所か？」

勝里も霧穂もかなり呆れている。イヅルや松本副隊長まで。婆さんは台所で野菜を切つていた。

……あ。

## 第九話 霧穂と乱菊

四人から俺が意識を失った後の話を聞いた。

虚を倒した事。婆さんの靈力が高いので、婆さんの家に滞在すると決め、俺を担ぎ込んだ事。

それはだいたい見当が着いたのだが、勝里と霧穂と乱菊さん（松本副隊長のクレームでこう呼ぶ事になつた）が来たいきさつの方が聞きたかつた。

「で、なんで勝里、霧穂、乱菊さんが来たんだ？」

1番理由が分かりそうな勝里に聞いた。

「ああ、俺が三番隊舎の屋上でサボつてたら吉良さんが血相変えて出てくるのが見えたんだ。で、オメーがやべえつて事を聞いて十番隊舎に向かつた。お前んとこ行くんだつたら霧穂も一緒の方が面白いから」

「面白いって何よ」

「面白いだろうが！」で、霧穂にその事を言つと乱菊さんが『現世に行くんだつたら私も！霧穂の上官だし！』って。そんな訳だ

「……お前、阿散井副隊長に報告は？」

一瞬の沈黙。そして一人の男の悲痛な叫び。

「あーーっ！忘れてたつ！やべえっ！」

勝里は伝令神機を片手に外へと出て行つた。

家の中が再び沈黙に包まれる。婆さんが野菜を切る音だけが淡々と響く。

「はあ……勝里は昔から抜けてるんだから」

霧穂が頭に片手を置き、やれやれという風に首を振る。

「抜けてるつつーより、サボリ癖が着いてるな。完全に。だいたい  
なんで三番隊舎でサボつてんだ」

「そりいえば松本さんは日番谷隊長に報告は？」

吉良が乱菊に尋ねる。乱菊は恐ろしい事をさらりと言つてのけた。  
「言つてないわよ。ウチの隊長は心が広いから」

その横では十番隊三席が沈痛な面持ちで佇んでいた。恐らく松本副  
隊長が日番谷隊長に怒鳴られる場面をよく目にしているのだろう。

「あ、隊長と言えば」

熙漸がイヅルの方を向く。

「俺が現世に向かう前に『市丸隊長の隊務の手伝いで行けない』と  
か言つてなかつたか？」

「灯峰君が危機に逢つているからと市丸隊長に無理を言つたんだ。  
万が一灯峰君にもしもの事があつたら僕の責任だしね」

「ギンにあんたが？」

乱菊が意外そうにイヅルを見る。無理も無い。イヅルは市丸隊長に  
異常なまでの畏敬の念を抱いていて、市丸隊長の言葉は絶対的な物  
だ。そのイヅルが隊長に意見する事は殆ど無い。

「あとちょっとでご飯が出来るから、これでも飲んでなさい」  
今まで野菜を切つていた婆さんが五人分の湯飲みと茶を置いた。各  
々礼を言つてそれを手に取る。

「珍しい事もあるものね〜」

ズズズ…と早速茶をすりながら乱菊が言う。

「あ、霧穂！ 麻鉢と灯峰とはどういう関係なの？ 三角関係？」  
ブーーッ！

同じく茶を飲んでいた霧穂が思い切り吹き出す。正面に座つていた  
俺は死神の姿であった為、その一撃を喰らわなくて済んだが、あま  
り気分の良いものでは無い。

霧穂は顔を真っ赤にして否定していた。

「そつ、そんなんじゃありませんてば！だいたい不意打ちなんて卑怯ですっ！」

「ははーん、当たりね～」

乱菊が意地の悪い笑みを浮かべる。その姿は完全に悪人だ。

霧穂が勝里に気があるのは知っていた。あと勝里が恐ろしく鈍いという事も。

靈術院でずっと同じチームでいたので、気付かない方がどうかしている。誤解を招かない為に言つておくと俺は霧穂にその気は無い。

イヅルは自分に火の粉が飛んでこない様にと、皿をつぶり壁にもたれて茶を飲んでいた。

俺もあえて無視するかと考へた時、上官への弁明と報告を終えた勝里が家の中に入つて來た。心なしか疲れている。

「熙漸サンキュー……」

「どうだつた？」

「ハハハ……最後には『吉良が居るんなひやつちに任せらる』って言つてくれたよ……」

『最後には』といつも言葉が引っ掛かつたが、そこは勝里の名誉の為に言及しない。

「いよつし、ぢつせだから手合わせしよつぜ……つ？……」

立ち上がろうとすると、ぐらりと体が傾いた。

そんな熙漸を見てイヅルが心配そうに声を掛ける。

「一応、左肩の怪我は四番隊の山田七席に治してもらつたけどね。靈力の消費が激しかったからまだ本調子は出ないだろ。灯峰君も義骸に入ると良い

「いや、でも義骸の手配面倒臭いじゃねえか。技術開発局はひねくれてるだろ?」

「問題無いよ。もつ手配してある」

イヅルが軽く手を振ると、義骸が現れた。クリーム色の髪の、俺の  
義骸。

## 第十話 暫飯後の畠仕事

「「いただきますー」「  
五人の声が重なる。婆さんは俺達がご飯を搔つ込むのをじこじこと  
微笑みながらその様子を見ていた。

白米と野菜の漬物と味噌汁という質素な食事。だが、とても美味しい。  
婆さんによると全部自分で育てた物らしい。

若干遅い昼飯を食べ終え、のんびりとしていると乱菊さんが立ち上  
がつた。

「お婆ちゃん、じかそしひになつたから何かさせてよ。みんな腕つ節  
だけはあるわよ~」

「『だけ』って……」

勝里がボソッと呟く。

「いいよ、若い子達は寬いでおくれ。こんなに賑やかなのは久しづ  
りだからね」

「居候させてもらつてるんだからそれは悪いわよ。何か無い?」

「そう言われてもねえ……そんなにする事も無いからねえ」

ボンヤリと一人の話を聞いていた熙漸が、ふと声を出す。

「あ、婆さん、畠仕事でも手伝おうつか?」

「ナイスアイデア!」

乱菊がパチンと指を鳴らし、指示を出す。

「男どもは畠仕事! 霧穂は家事! も、取り掛かれ!」

なぜかその言葉には力が感じられ、皆バタバタと家を出していく。  
そんな中、イヅルがふと足を止める。

「松本さんは?」

「……ばれたか」

「何言つてんすか！」

勝里が口をパカッと開ける。

「あー、仕方ないわね。私も家事をするひとしますか」

霧穂が何かに気が付き、乱菊に尋ねる。

「虚はどうするんですか？」

「……灯峰で良いんじゃない？ 今ここの担当しているの灯峰って事になつてるんでしょうか？」

「そりや無えよ……」

「もう全員で良いんじゃないか？ 僕から時計周りって事で」

イヅルが自分を指差し、指で小さく円を描く。

「それで行きましきよ」

霧穂が頷いている横で乱菊が口を尖らせる。

「え～、私も～？」

「……」「……」

「な、何よう！ [冗談に決まつてゐるじゃない！]

全員に白い目で見られ、乱菊が慌てて付け加えた。

「婆ちゃん、これ取りにくいくんだけど」

熙漸が赤い野菜を指差す。いつの間にか、呼び方は『婆さん』から『婆ちゃん』になつていた。

「ああ、トマトは～」

婆ちゃんは実を手にとつ、左右に軽く回す様にして器用にもぎ取つた。

その腕に舌を巻く。

「婆ちゃんすげえな」

「長年やつてると自然に身につくものだよ」

そのトマトを熙漸の背負う籠に入れると、愉快そうに笑った。

横の畑ではイヅルがキュウリの刺に苦戦し（あ痛つー）、畦道を挟んだ田んぼでは勝里が雑草抜きに腰を痛めていた（つー腰がつー）。

### ピースピースピース

伝令神機が鳴り、虚の来訪を告げる。

「いよつし、次は俺だな」

勝里がソウル・キャンディを口に入れ、死神化する。虚の場所を確かめると、瞬歩でそこへと向かつて行った。

義魂丸の入った勝里の義骸は文句一つ言わず仕事に取り組んでいた。恐らく本人より効率が良いだろう。

婆ちゃんが俺とイヅルの収穫した野菜を家まで持つて行ったのを見計らつて、イヅルに話し掛ける。

「イヅル、あの虚の事なんだが」

キュウリを両手に持つたまま、イヅルがこっちを向く。

「その話は今夜、お婆さんが寝てから話そう。話す事は山ほどあるやはり、忘れていた訳ではなくタイミングを計つていたらしい。

「りょーかい」

虚を倒したらしく、勝里が帰つて來た。義骸の頭を軽く叩くと、口から小さな球が転がり出て義骸の動きが止まる。勝里は軽く息を吸い、義骸の中へと入つた。

「なんか雑魚ばっかりだな」

「当たり前だろ。あんな奴がいつも出て来て堪るか」

熙漸が本当に嫌そうに言つ。

「あ、勝里ー、調子が戻つたら少し手合わせしようぜ」

「お前さつきも言つてたよな。俺がそんなに嫌いなのか？」

「お前が練習相手に一番良いんだよ。今までずっとやられたしな」

「俺じゃなくても霧穂が居んだろうよ」

「霧穂が強えのは分かってるけどよ……なんつーか……女だし」

「お前……霧穂と乱菊さんの前でそれ言つたら確實に殺されるぞ」

「だよな……」

偏見だと自分でも分かつていて、その考えはあまり拭えない。たまに女の子らしい所を見ると尚更だ。

「まあ、灯峰君の言つ事も分かるけどね」

睦道に上がり休憩しているイヅルが言った。

「吉良さんは離森さんに惚れていますもんね」

「なつ！？そんな事無いよ！……誰から聞いたんだい？」

「阿散井さんから聞きましたー」

そんな他愛のない話をしていると、空が朱く染まつていった。

## 第十一話 囲炉裏を囲んで

夜。婆ちゃんが寝たのを見計らつて、囲炉裏を囲んで死神達が座る。イヅルが話を切り出した。

「さてと、ジニから話そつか？」

熙漸が疑問に思つていた事を口にする。

「あの一匹の虚は一体何なんだ？大虚メノスでは無いだろ？けどよ。他とは桁違ヒゲいだ」

「あれは僕が靈術院生の時に遭遇した虚とよく似ていた。恐らく巨ヒ大虚ヒだ」

「靈術院の時にあれを倒したんですか！？」

霧穂がイヅルに尋ねる。

「いや、勿論歯が立たなかつた。藍染隊長と市丸隊長 その時は副隊長ヒヨウテンショウだつたけどね に助けてもらつたんだ」

初耳だつた。という事は、その時にイヅルは市丸隊長に惚れ込んだつて訳だ。

「あれ程の靈圧を持つた虚が何故観測されなかつたんだ？技術開発局とかに」

「……灯峰君がその虚に遭遇した時、その靈圧が近付いて来るのを感じたかい？」

そうだ。全く感じなかつた。振り向いて初めて気が付いた程に、全く。

イヅルはその答えを予期していた様に頷いた。

「そう、あの虚達は自在に靈圧を消せる」

「なつ……」

勝里が思わず声を漏らす。

「そんなの……まるで死神じゃないですか……」

「正直、ヒュージレベルが現世に居るとは思わなかつた。……巨大虚が危険視される理由は他にもある」

イヅルが言わんとする事が俺には薄々分かつた。出会つた時に疑問に感じた事だ。

「巨大虚は必ずと言つていゝ程、集団で行動する。一匹だったのは運が良い方だ」

「虚が群れるんですか？」

霧穂が驚きよりも寧ろ興味津々といった風に尋ねた。

「そうだ。虚は普段単体で行動する筈だ。巨大虚は知能も能力もかなり死神に近い」

「……熙漸よく生きてたな……」

「舐めてんのか！」

氣の毒そうな目を向ける勝里に半ば本氣で怒鳴る。正直な所、イヅルから話を聞いていく内に自分の置かれていた状況にゾッとした。それを傍目に、霧穂がイヅルに尋ねる。

「私達が此処に残つている理由もそれですか？」

「察しが良いね。……巨大虚がたつた一匹しか居ないとは考えにくい。暫く様子を見ようと思う」

「じゃ、俺達もまだ居て良いんすね？」

勝里がなぜか目を輝かせて尋ねる。

「阿散井君に報告をしたのなら良いと思つよ。十番隊については……何とも言えないけどね……」

イヅルが乱菊と霧穂の方を見ながら言葉を濁す。

乱菊さんは俯いて黙っている。田大虚の話が始まつてからとつとも、ずっと黙つている。いつもはお喋りなのに珍しいものだ。

……まさか。

皆同時に同じ事を思つたのか、顔を見合わせる。

一瞬の間。

「う、乱菊さん？」

横に座つていた霧穂が乱菊の肩を揺さぶると、そのまま後ろに倒れ込んだ。完全に寝ている。イヅルが右手を頭に当てる。溜め息を吐く。

「仕方ないな……」

婆ちゃんが敷いてくれた掛け布団の一つを取り、仰向けに寝る乱菊に掛ける。

「成る程ね……」

指に髪を巻いて弄びながら呟く。賑やかに成るのは嬉しいが、それは俺が非力だからだ。素直に喜べない。

そんな様子を見ていたイヅルが熙漸に声を掛ける。

「灯峰君、僕で良ければ相手をするよ。鍛練がしたいんだろ？」「……気持ちはありがたいけど、ケジメつけないといけないんで」斬魄刀を手に取り、立ち上がる。

「どこ行くんだ？」

「散歩だ」

勝里の質問をさらりと受け流す。霧穂が静かに言つ。

「無理はしない様にね」

「わかってるよ」

戸を押し、外に出る。都会の喧騒と程遠いこの土地では、晴れ渡つた夜空に無数の星が輝いていた。

屋根にふわりと飛び乗り、胡座をかく。刀を膝の上に乗せゆっくりと戸を開じ、呼び掛ける。

雷牙。

戸を開けると、そこには雷雲立ち込める荒野だった。

『つまらぬ事を言つて来た訳では無からうな』

声の方を振り向く。そこには淡い光を纏つた虎の姿があった。

## 第十一話 雷雲の下の決闘

雷虎は鳶色の澄んだ目でじらじらを見てくる。俺の心を覗くかの様に。

「負けたのは単純に俺の力量不足だ。済まない」

雷虎は鼻をフンと鳴らした。それに連動する様に雷虎の体の光がバチッと弾ける。

『本当に下らぬ事を言いに来たのか。呆れた奴だ』

「違う」

腰の斬魄刀を抜き、それを雷虎に向ける。

それを見て、雷虎が嬉しそうに牙を鳴らす。

『最初からそうすれば良いものを。我等の間に礼儀など要らぬ』

「俺はお前の力を知りたい。それだけだ」

『言つた筈だ。我的力はお前の力だと』

「分かつて。俺は……強くなりたい。無力さを感じるのはこれつきりだ」

『……それだけの覚悟が有れば、もう言葉は要るまい』

雷虎が尾をはらつと振り、高らかに叫ぶ。

『来い！熙漸！』

雷虎の口から雷の矢が放たれる。体の向きを横に変え、ぎりぎりで避けた……筈だった。

「つ！」

体を襲つた痺れに声が出るが、堪えて剣を振る。雷虎はそれを易々と躲し、声を張る。

『知つてゐるだろ？！我が雷は筋肉を麻痺させる！そんな速さでは

何も斬れん！』

「クソツツ」

言葉を言い終えぬ間に瞬歩で雷虎の背後に回り込む。

『遅い』

横目でちらりと熙漸の位置を確認すると、鞭の様な尾をしならせる。その尾に向かって、左手の指を翳す。

「衝！」

バンツ

『…』

衝撃により軌道がズレた尾を避け、がら空きになつた背に剣を振り下ろした……が。

バチンツ

「ちつ！」

刃が背に触れるか触れないかという所で、派手な音と共に剣が弾かれる。雷虎の躯に纏う雷に阻まれたのだ。

『ふん……太刀筋が温い！』

「うつせえ！」

悪態をつきながら後ろに飛び、しなる尾の一撃を避ける。本気で振り切らねえと弾かれるか……

『縛道は効かぬ。私はお前の靈力自身だ！』

「わかつてゐつづーの……前聞いた」

俺がまともに打てる鬼道は雷電系だけだ。雷牙にそんな技が効くとは思えない。なら……

軀の周りの雷が音を立てて弾ける雷虎を見遣る。それは軀中の雷が

共鳴している様に、光と音を増していく。雷虎はこちらが動くのを待っているかの如く微動だにしない。

今の俺が“此処”に居られる時間も知れている。とつと行くか……

ヒュッ

風を切る音を残し、熙漸の姿が消える。直後に雷虎の眼前に現れ、その頭に刀を振り下ろす。

『まだ遅い』

ガンッ！

頭を横に傾け、一本の鋭利な犬歯で受け止める。手の中の刀に力を込めるが、刀が奥に進む気配は無い。

「クソッ！」

ヒュッ

攻撃を一度諦め、瞬歩で後ろに回り込む。

『同じ手は一度も通用せんぞ』

雷虎が先程とは違い、振り向いて牙を剥ぐ。が、そこに熙漸の姿は無かつた。

『！？』

ヒュッ

雷虎が振り向くと同時に、熙漸は雷虎の真上に現れていた。両手で握った剣を思い切り振り下ろす。

ガガガガツ

雷と刃の拮抗する激しい音が辺りに響く。今回は熙漸の刀が弾かれない。

「オオオオオツ！」

刃がじわじわと軀に近付いていく。それが触れようかという時。

サツ

雷虎が横に軀を動かし、剣を避ける。

「なつ！？」

本気で力を込められていた刀は斬る物を失い、荒い岩肌の地面に深く突き刺さる。

雷虎は引いた軀を戻すかの様に、体重を掛け熙漸の体にぶつかる。「がつ！」

両手は柄を握つたままだった為、重い一撃を喰らった無防備の体は易々と吹き飛んだ。受け身をとり、顔を上げて雷虎の方を見る。

吹き飛んだ時に柄から手を離したので、剣は地に刺さつたままだった。

地面に突き刺さつた刀の側で、雷虎は静かにこちらを見つめていた。鳶色の瞳で、こちらを射抜くのではないかと錯覚する程に強く。

『フェイクか……随分と利口な戦い方をするように成つたじゃないか』

口調とは裏腹に、雷虎は表情を緩めた。

『見事だ』

瞬きをした直後、俺の眼に映ったのは畠道、田、畠、満天の夜空、死霸装で剣を交えるイヅルと霧穂。

……え？

「お、終わったか」

横からいきなり声がした為、熙漸の肩がビクッと揺れる。

「！？いきなり話しがけんな！ビックリすんじゃねえか！」

自分の横に座っていた勝里が笑う。

「ははっ、熙漸今マジでビビったよな？」

「んな事無え！」

「……で、“散歩”はどうだつたよ？」

一転して、落ち着いた静かな笑顔で勝里が聞いてくる。

『見事』、か。

思わず笑みが浮かぶ。

「ああ……上々だ」

## 第十二話 熙漸とイヅル

勝里との騒がしい会話で気が付いたらしく、イヅルが霧穂に向かって掌を出し、俺の方を指差す。その指の先に視線を向け、霧穂も気が付く。

「あ、熙漸！ 終わったんだ」

二人は刀を鞘に納め、ふわりと屋根の上に跳んで来る。

「なんで一人が斬り合ってんだ？」

熙漸の問いに、なぜか勝里が拗ねた様に口を開く。

「俺もやりたかったのによー」

霧穂が眉をつり上げる。

「三つ巴なんて洒落にならないでしょ。人数的な問題よ

「じゃあ熙漸もやろうぜ」

「俺は一体何なんだ？……後でな。少し疲れた。にしても、よくイヅルと戦えたな」

熙漸が霧穂に感心すると、霧穂は軽く笑つて首を振った。

「ふふ、違うわよ。吉良副隊長は靈圧の封印受けてるもん。普通になら勝てる訳無いじゃない」

「そんな事無いさ」

イヅルが微妙な表情を作つて答える。

全く……こいつは横に居ても何考へてんのか全然分からん時がある。

イヅルの横顔をちらりと見ながら、話を戻す。

「三人で適当にやつてくれよ。ここ見てつからさ

「だから！ それじゃあ俺は暇なんだよ」

勝里が不満げに言つて、イヅルが腰を下ろす。

「僕もし休むとするよ。一人ですると良い

「吉良さん、ありがとうございます！」よつしー霧穂やるかー二席が四席に負けんなよ！」

「まあギタンギタンにされないようにね」

軽口を叩き合いながら一人が下に降りる。

「彼らも友人かい？」

イヅルが穏やかな目で、刀を構える一人を見ながら尋ねる。視線を勝里と霧穂からイヅルへと移し、少し間を置いてから答える。

「ああ、バカだけどな、良い奴らだよ。イヅルは最近どうだ？」「最近は……至らない部下の為に現世に来て、暇をしない生活を送つているよ」

彼にしては珍しい、悪戯っぽい目をしながらイヅルが答える。

「至らない部下で悪かつたな。吉良家の若当主さん」

視線を戦う一人へと戻し、両手を後ろに着いて楽な姿勢になる。

「冗談さ、灯峰家の次期当主君」

「ははっ！……なんか懐かしいな、こんな話すんのも」

「そうだね。……灯峰君のご両親には、とてもお世話になつた」

イヅルは幼くして両親を失つた。元々仲が良かつた為、身寄りを失つたイヅルの面倒を見る事を俺の両親は躊躇わなかつた。

俺が靈術院に入るのと同じ時期に、俺の母親は病で命を落とした。その時はイヅルに支えられた。本当に。

「お父さんは元気でやつてるかい？」

「ああ、ほんと元気さ。たまにはイヅルも顔を見てやつてくれよ。俺が行くより喜ぶぜ」

「じゃあ、この件が片付いたら伺うとするよ」

「そう言われたら、俺も張り切つてやらねーとな。……あーあ、と

つとと虚でも何でも出て来ねえかな」

四肢をバタッと投げ出し、熙漸が後ろに寝転がる。

「……僕等が来ないと危なかつたじゃないか」「それを言つか？」

熙漸がわざとらしく悲観的に言つのを見て、イヅルが笑う。

「必ず行くよ」

「心よりお待ちしています」

ニヤツと笑いながら、熙漸が体を起こす。熙漸とイヅルは柔らかな笑顔のまま、勝里と霧穂の方を見る。

？

「と」「ひで、あの二人だとビビりが強いんだい？やはり折本三席か？」

「んー、剣術は断然霧穂の方が上だけど、鬼道においては勝里が優つてるからな。五分五分つてとこだ。勝里が四席なのは勤務態度のせいだと思うぜ」

「確かに、彼はよくウチの隊舎の屋根に居るね」

「全く……よく六番隊に入隊出来たもんだよ」

六番隊の朽木隊長は現隊長の中で一・二を争う程に真面目で厳格だ。  
……阿散井副隊長の方はそうでも無いらしいが。

「真面目に仕事やりやあ三席になれると思つただけどな」

「ほらほらほらア！構えが甘い！」

「くつ……五月蠅えつ！」

回りながら繰り出される霧穂の攻撃を防ぎ、勝里が叫ぶ。

「防ぐだけじゃあ勝てないわよっ！」

「がーーっ！ 分かつてるわ！」

勝里が刀を一振りし、後ろに飛び下がる。一分の隙も与えないように、霧穂は攻撃の手を緩めない。

踏み込みながら剣を正面で構え、剣道の“メン”の要領で振り下ろす。

勝里は峰を左手で支え、それを防ぐ。なんとか眼前数センチという所で刃が止まる。

「ぐつ……くそつ」

刀を強引に押して弾き返し、斬り掛かる。しかし、そんな攻撃が通る筈も無く、霧穂にあっさりと払われる。

刀を持った右手が後方へと弾かれ、勝里の正面ががら空きになった。

勝里の方へ刃を向け、霧穂が宣言する。

「私の勝ちね」

「……破道の三十一！」

「はーーー？」

突然目の前に広げられた左手に、それを見た三人が驚愕する。

「なつ！？ 鬼道もアリなのかい？」

屋根の上から見ていたイヅルが、同じく目を見開く熙漸に尋ねる。

「……多分勝里がバカなだけだ。負けず嫌いなんだよ。ま、あいつらああ見えても幼馴染みだから本気では打たねえだろ」

「嘘つ！？」

冗談だと思ったかったが、言靈を唱えられた左手には赤い輝きが湛えられていた。

それに続く言葉を発そと、勝里が口を開く。

「赤火砲！」

向けられた掌から、球状の火炎が発せられる。それを避けるには、  
勝里と霧穂の距離はあまりにも近かつた。

「……」

赤火砲の爆発により、砂煙が巻き起こる。

「……前言撤回。本気で打ちやがったな」

「彼女は大丈夫か？」

イヅルが焦つた風に聞く。

「いや、この靈圧は……」

「……上等じやない」

スパン

刃が空氣を裂く音と同時に、立ち込める砂煙が縦に裂ける。

「死んでも怨まないでよ！ 勝里！」

刃から異様な劍圧を放つ薙刀 豪割丸を携えた霧穂が叫んだ。

## 第十四話 真剣勝負

左手を刀の峰に添え、勝里が叫ぶ。

「立ち塞がれ、亀楼丸！」

勝里の言葉に、斬魄刀が巨大な両刃剣へと形を変える。刀身は横にも大きく、その影に人が一人は隠れられる程。重量を伴う亀楼丸は防御にも優れ、並の攻撃なら後退する事は無い。

「これが彼等の解放か……手合わせしてみたいね」

イヅルが声を漏らすのを聞き、「冗談交じりに言つてみる。

「どっちもパワー型だからイヅルにとって相性良いな」

「……折本三席の方は少し曲物のようだけどね」

思わずイヅルの方を向く。

正真、いきなり霧穂の力を見抜くとは思わなかつた。流石は隊長格といつ所か。

その事を素直に言つとイヅルは苦笑した。

「あれだけ刃から靈圧を発していれば分かるさ」

確かに。今日はいつもに増して靈圧の高まり方が尋常でない。まさか本気で相手を殺す氣で居る訳では無いだろ？

つまり、だ。あいつらは互いに『これであいつが死ぬ筈無い』と確信を持つて全力でぶつかつてる。正真、そこまで信頼し合えるのは羨ましいとさえ思つ。

俺は、どうだ？

思わず、目の前の二人に問いたくなる。

俺はお前らの中に“後から”入った。

俺を疎ましく思つた事は無いか？俺はただの同期か？俺はただの友人か？俺は、お前らにとつて何なんだ？俺は、お前らみたいに互いに信じ合える存在なのか？

ガキン

豪割丸の刃を亀楼丸で防いだ勝里が、剣の影から左手の指を霧穂に向ける。破道を打つつもりだ。

そんな様子が、熙漸の眼にちらりと映る。

馬鹿だな、俺は。『信じ合えるのか』と尋ねるという事は、俺がいつらを信じてないって事じゃねえか。

ふと、先日の雷牙の言葉が浮かぶ。

『お前は仲間を信じてはいない』

当たりだよ、雷牙。俺は自分も仲間もろくに信じられない。  
全く……嫌だ嫌だ、こんな俺は。

「全く……柄にも無えよ」  
ポツリと呟く。

それが聞こえなかつたのか、或いは聞こえなかつたフリをしたのか、傍らのイヅルは変わつたそぶりも見せず、火花を散らす一人を見ている。

### ガキイン

刃と刃がぶつかり合い、派手な音を鳴らし火花を散らす。

「あのお婆さんの事はどう思う？」

突然のイヅルの質問に、暗い場所から引き戻される錯覚を覚えた。意図的であつても、意図していなくとも、救われた。

「どうつて……良い人だよ。いきなり来た俺達に事情を知らなくても飯も寝床も与えてくれるし」

「……そうだね、お婆さんは確かに良い人だ。……言い方を変えよう。魂魄として、どう思う？」

なぜか、その問いに答えたくない自分が在つた。イヅルは核心に触れようとしている。本人が寝ていてる前では言いづらかった。イヅルはそれを察して今聞いてくれたのだろう。重ね重ね、助けてられてばかりだ。

数秒の間を置いて、慎重に言葉を選ぶ。

「……生前の状態で死神が見えたり触れたり出来る程に、婆ちゃんは持つてゐる靈力が半端じやない」

イヅルは目を閉じて俺の言葉に耳を傾けていた。何かしらの返事を期待したが、それが無いという事は『続ける』という意味だろ？  
そつ受け取り、言葉を続ける。

「巨大虚は婆ちゃん……若しくはそれを守る死神を狙っているように思える」

巨大虚が現れる前から、虚が付近に出現した事で薄々気付いていた。が、認めたくなかった。婆ちゃんに情が移つたせいかもしれない。

イヅルはその答えに満足したのか、頷いて目を開く。  
「僕も同意見だ。なら……言いたい事は分かるね？」

ゆっくりと首を縦に振る。

「巨大虚達は、あの多大な靈力を持つ魂魄に惹き付けられて出現している。あのお婆さんの置かれている状況は、最悪と言つてもいい」

巨大虚の狙いが婆ちゃんなのか、それを守る死神なのかは分からない。

後者ならば、巨大虚が 今のところ 婆ちゃんを殺さない理由がつく。そして、もしそうならば、死神が五人も集まつている今の状況は奴らにとって最高の舞台だろう。

イヅルにその旨を伝えると、またもや同意見だった。

「そう、奴らがこの状況を見逃す筈がない。もつとも、いつ襲撃を仕掛けてくるかまでは分からぬけどね」「やうだよな……」

勝里の蒼火墜を払つた霧穂が柄に左手を添え、体ごとぶつかる様に突いた。

流石に防ぎ切れないと感じたのか、勝里がヒラリと身を躲す。その後に、勝里の居た地面がえぐれた。

この際だからと、婆ちゃんを呑み込んだ時から心の中にしつかえていた物を口に出してみる。

「この件に片が付いたら……婆ちゃんの記憶消さねえといけないんだよな……」

「……それは仕方ないよ。決まりだ」

分かつてる。分かつてるから、辛い。席官ともあろう者がこんな様では情けねえな……

「あー、ダメだー。じつとすると辛氣臭くなるー。」

胡座を崩して立ち上がり、刀を抜く。

「灯峰君？」

「刀を抜け！イヅル！」

一瞬呆気にとられた様に目を開いていたが、ニヤツッと笑い同じく立ち上がった。

「解放はするのかい？」

「咬み砕け、雷牙！」

イヅルの問いに答える様に解放した熙漸を見て、呆れの交じった苦笑を浮かべた。

「荒々しい回答だね。怪我をしても知らないよー。」

「お願いします！吉良副隊長！」

不思議そうな顔をしたのは一瞬だった。久しぶりに聞いた、と呟き、刀を構える。

「いくよ……灯峰三席」

互いの顔から笑みが消える。

そうだ。俺にも真剣になれる奴が居たじゃねえか。こんなにも近くに。

そんな事を考えながら、目の前の親友の姿を見る。

その親友は口を開き、高らかに叫んだ。

「面を上げろ、佗助！」

## 第十五話 灰色の再来

「ちょっとーあんた達いつまで寝てんのよー。」

騒々しい声に起こされ、目を擦る。

周りに目をやると、イヅルも勝里も霧穂も寝ぼけ眼を擦っている。  
唯一人元気な乱菊さんは腰に両手を当て、溜め息を吐いた。

「全く……だらし無いわね~」

その後……連戦が連戦を呼び、最後は三つ巴ならぬ四つ巴に纏れ込み、もう何が何だか解らん事になっていた。疲労感甚だしい。  
そんな事を知る筈もない乱菊さんは、かなり元気だ。あれだけ寝れば当たり前か。

「乱菊さん、昨日の話覚えてますか?」

寝起きの機嫌がかなり悪い勝里が、やはり不機嫌に聞く。

「昨日?……何か話したつけ?」

駄目だ。やっぱり最初から寝てたらしい。

「もうちょい寝かせて下さいよ

上半身を起こしていた勝里が、布団にバタリと倒れ込む。

「起きなさい!」

乱菊さんの足蹴を勝里が布団で防ぐ。

馬鹿馬鹿しい攻防から数分。

「で、今日は何すんだ?」

何とか眠気を押さえ込んだ勝里が尋ねる。  
尤もな疑問だ。俺も分からない。

何故か視線がイヅルに集まる。

「奴らが現れるまではこれといってする事もないよ」

「あー、なんか暇なもんだな」

「嫌なら帰つていいんだぜ?」

「帰るかバカ」

「霧穂ー、買い物行きましょー。」

「買い物ですか?」

霧穂の目が輝く。

「そ。同じ服いつまでも着てる訳にもいかないでしょ?」

「はいっ!」

「お婆ちゃん、最寄りの駅はどっち?」

「そこの道を真っ直ぐ行けば着くよ」

婆ちゃんが戸の方を指差す。家の正面の方角らしい。

「お婆ちゃん、ありがと!よつし、行くわよ」

「はい!」

バタバタと二人が出て行った。暫く、家の中が静かになる。

「……決断早えーな

「全くだね」

「あ、俺暇だから見回り行つてくるわ」

胡座を崩して立ち上がり、義骸から抜ける。バタリと自分の義骸が倒れるのは、見てて何とも言えない。

「じゃ、僕らは畠に行こうか」

「えー……はーい」

渋々といった風に勝里が頷いた。

「こんなもんだな」  
若い青年の靈を魂葬し、刀を鞘に納める。空を仰ぐと、陽が暮れかけていた。

昼飯抜いちまつたな……晩飯倍食つか。

手頃な屋根を見つけ、その上にござりと寝転がる。

「ふーっ

目を開じ、靈圧を探つてみる。

霧穂や乱菊さんはまだ帰つてねえな……勝里といヅルは……畠仕事だな。婆ちゃん家に近い。

雲がゆるりと流れしていく。  
空が段々朱くなつていく。  
風が俺の髪を撫でていく。

平和。今のこの風景には、その言葉が一番適しているように思えた。昨日、絶体絶命にまで追い込まれたのが嘘みたいだ。

ガンッ

突然、世界が揺れた。

「！……来やがった！」

ダンッ！

足に力を込め、婆ちゃんの家に向かつて踏み込む。直ぐに佗助と亀  
楼丸の靈圧を感じる。

俺も急がねえとッ……

亀楼丸を醜い顔に振り下ろす。頭がパックリと割れ、消滅を始める。  
それを見る暇も無く、振り返つて重い爪の一撃を防ぐ。

「クソッ！ キリガ無え！ ……あと何体つすか！ ？」  
「ガニッ」と爪を弾き返し、その腕を切り落とす。

佗助の攻撃を受けて両爪が垂れ下がった巨大虚の頭を斬り裂く。そ  
のまま奥に居た虚の爪を斬り付けながら、勝里の問いに答える。  
「そんなのっ！ 見れば分かるじゃないか！」

もはや巨大虚の群れのせいで姿の見えない麻鉢四席の不満げな声が、  
何処から聞こえる。

「分からぬから聞いてんすよ！」

「見れば分かるだろう！『分からぬ』が答えたよ！」

佗助に攻撃を防がれた巨大虚の腕がだらりと垂れ下がり、頭が剥き  
出しになる。そこを迷わず叩き割る。

「何すかソレ……屁理屈すか！？ それとも厭味つ……すかつ！ ？」

「一体の爪を押し返しながら勝里が叫ぶ。

「数えてる暇なんて無いよつ！」

勝里に向かつて叫びながら、ちらりとお婆さんの家を見る。  
そこは白みを帯びた膜で覆われていた。イヅルの張った結界だ。

限定解除申請の時間すら『えてくれない』……せめて松本さんが申請をしてくれれば……

「え?」

思わず情けない声が出る。

ふと目をやると麻鉢四席も一いつ朶ぱくを見ていた。その後ろには巨大虚の爪が迫っている。

「あいつら……遅くないですか?」

「同感だよ……」

イヅルが言い終えると同時に、互いに右の指を相手に向ける。

「白雷ツー!」

指先から発せられた雷撃が、互いの背後に居た虚の頭を撃ち抜く。

二人はニヤツと笑う。

「君とは上手くやれそうだよ」

「同感つす」

突然、複数の虚の腕が吹き飛ぶ。

「悪い! 遅れた!」

「ヒューッ、随分キザな登場してくれるじゃねえの」

雷牙を携えた熙漸が顔をしかめる。

「キザつて言うな。苛つく」

「おつと、避けてくれよ! 破道の二十三!」

ヒュッ

熙漸が瞬歩で姿を消した直後、蒼撃が虚を討つ。

勝里の後ろに現れた熙漸が、辺りを見回してから尋ねる。

「で、あの紅一点は?」

「紅一点なんて言葉は無えだろ。まだだ」

「そんなにのんびり話す時間は『えてくれない』よ。まだまだ斬る相手はいくらでも居る」

イヅルが佗助を構え直して言つ。

婆ちゃん家の周りは巨大虚の群れで溢れていた。5、6なんてもん  
じゃない。軽く一桁は居る。

「おいおい……イヅルが靈術院の時もこんな数だったのか？」

「いや、ここまで酷くは無かつた。これだけの数居れば、もう圧巻  
だね」

イヅルがやれやれ、という風に首を振る。

「まあ……この数が出て来たという事は、恐らくこれで全部だらう  
ね」

「それ聞いて、ちょっとやる気出ましたよ」

勝里が力無く笑う。

その直後には、三人とも敵しか見ていなかつた。

「行くよ！死なないようにな！」

「当つたり前だ！」

## 第十六話 終焉

両手に大量の荷物を抱えた一人の女性が、ブランド店から出てくる。周りの人々は最初こそ怪訝そうに見ていたが、やがて女性の色気に当たられ、目を釘付けにする。

「ふーっ、結構買い込んだわね！ 魂界のみんなへのお土産も買つたし！」

「乱菊さん……この靈圧……」

赤髪を後ろで束ねた女性が、彼方の空を見上げる。数多の虚と、間違いよつの無い仲間の解放の靈圧。

「あれは見逃せないわね……」

もう一方の金髪の女性が前を真っ直ぐ見据えながら言つ。

「はい……」

「高級バッグの大安売り」

「はい……はい？」

赤髪の女性、霧穂は自分の耳を疑つた。思わず横の上官の顔を見る。その顔は真剣な眼差しで『大安売り』と書かれたチラシを見つめていた。

「あれは義魂丸には任せてくれないわね」

「らつ、乱菊さん！……勝里が喰らつた……正氣ですか！？」

「霧穂は先行つてなさい。私は後から行くわ」

絶対行く気無い。あまりにも日が輝いている。

「吉良を本気にさせとけば、まあ何とかなるでしょ」

乱菊さんは懐から伝令神機を取り出すと、それを耳に当てる。

「……なかなか繋がらないわね……こんな時に……霧穂、行きなさい！」

「はい！」

迷う必要は無かつた。義魂丸を口に入れ、死神化する。その場から、黒い袴を纏つた霧穂の姿が消えた。

「いつ……痛エんだよボケ！」

勝里が、自分の背に一撃を加えた虚の腹を斬り裂く。

「大丈夫か！」

佗助で虚の腕を防いだイヅルの声に答える。

「大丈夫ですよ！」

腹を斬られた虚と他の奴が勝里の方を向く。直後、同時に来た二匹の虚の攻撃を防ぐ。

「こんなもんか！」

更にそれぞれの虚がもう一方の腕を繰り出す。

ガガツ

単純に倍の重みが剣にかかり、僅かに後退させられる。

「つ……んの……」

攻撃を凌ぎ、顔を上げると三匹目が迫っていた。

「あー、ヤツベ……」

ズバン！

三匹目の巨大虚の頭が縦に裂ける。割れる頭蓋の向こうから見えた

のは、薙刀　豪割丸を携えた霧穂。

「全く、情けないわね」

「ハツ、キザな登場してくれるじゃねえか」

「またかよ」

熙漸が呆れた様に呟く。

「あんたね……普通女の子に向かつてキザって言つ?」「うつせ!こいつらテメーにやるよ!」

亀楼丸に力を込め、一匹を霧穂の方へ押す。

「ほんつと……あんたは騎士道とか持つてないの?」

そう言いつつも霧穂の顔には笑みが浮かんでいた。刃に淡い光が宿る。

「あ、そうだ。吉良副隊長!限定解除許可下りました!」

イヅルが霧穂の方を向き尋ねる。

「松本さんは?」

「あー……諸事情です」

「全く、何をやっているんだか……けど助かった……」

ガツと手を左胸に当て、イヅルが叫ぶ。

「限定解除!—!」

「ドドドドドッ!

空へと逃げようとした巨大虚の体を、周りから五枚の刃が貫いた。

「ガアアアアアア!」

断末魔と共に虚の体が消滅していく。

「ふう……終わった」

キン

余韻を楽しむかの様に、ゆっくりと刀を鞘に納める。

「最後の奴倒したの、俺だよな?」

「なーに言つてんのよ、私じゃない」

「阿呆か!俺だろうがよ」

「阿呆か」

口論する勝里と霧穂を見ながら、呆れ返る。

「何事も無く終わって良かつたね」

婆ちゃんの方を見ながら、イヅルが穏やかな表情を浮かべる。

「ああ、そうだな」

同じく婆ちゃんの方を見る。そこは未だイヅルの結界が張られていた。

……まだまだ敵わねーなー……

「ありがとな、アレ」

右の親指で結界を指す。

「なんで灯峰君が礼を言つんだい?当然の事さ」

イヅルが軽く微笑む。

こいつは昔からこいついうキザな　あ、自分で言つちまつた　微笑がサマに成る。まあ微笑しかしていない性で、それが板についているからだとは思つが。

たまには大口開けて笑やあ良いのにと思つ事もしばしば在つたが、最近それは無理だと悟つた。今更ながら。

「じゃあさ……これで、終わり……だな」

「ああ、完了。此処に居る理由はもう無いよ」

「だよな……」

「あとはお婆さんの記憶を消すだけだ」

「来た。無意識に、僅かに目を伏せる。

いつの間にか勝里と霧穂の馬鹿話は終わり、黙つてこちらの話に耳を傾けていた。

「熙漸、俺がやうつか？お前キツそうだからよ」  
勝里の声に首を振る。

「いや……俺が行く。勝里達は先に帰つてくれ」

「……分かつた。先に行つているとしよう」

イヅルが開錠の用意に入ろうとすると、場違いな高い声が響いた。

「ちょーっとー！私！私忘れてない！？」  
素人が見てもそれと分かる高級服に身を包んだ乱菊さんが、畠道から歩いて来るのが見える。その後ろには大量の荷物を抱えた霧穂：の義骸。  
「」「…………」「」

沈黙という槍が乱菊に向かつて投げられるが、“悪びれない”といふ最強の武器によつてたたき落とされる。

「霧穂の分も買つといたわよーー！」

乱菊さんがブランドバッグを二つ掲げると、霧穂が墮ちた。

「あ！ありがとうございます！」

霧穂が乱菊の方へ飛んで行くのを見て、男達は呆れる。  
女つて奴は……

「十番隊の穿界門に靈子変換機の組み込み、頼んでおいたわよ」  
何故そういう事の手際は良いんだ？謎だ。

女性達が楽しそうに話すのを、二人は別世界の事の様に眺めていた。

「んじゃ、先行つてるぜ」

「ああ、直ぐに後を追つてやるよ。吉良副隊長、帰つたらこの件について書類まとめなことこけませんよね?」

「当然だよ、灯峰三席」

そう行つてニヤツと笑う一人を見て、乱菊が呆れる。「真面目ね~、あんた達」

「そんな事無いですよ。な?」

「そうですよ、松本さん」

「はーっ、訳分かんない」

乱菊さんが両手を頭の高さに上げ、首を振る。

「ま、後で会いましょ、熙漸

「おう」

「けど、記憶消すだけだろ?それくらい待つぜ?」

「いいんだ、先行つてろ」

「わーかつたわかった。そんなキレんなよ」

「それじゃ、行くわよ?」

乱菊さんが正面に刀を向け、言葉を発する。

「開錠!」

## 第十七話 葬送曲

四人が帰つて行くのを見届けた後、ストッと地に足を着ける。

ふと辺りを見回すと、もつずつかり見慣れた畠と田。

この時期に収穫する野菜は全て取り終え、もつ田の雑草も無い。残っているのは、秋と冬に収穫する野菜と順調に成長している稻。緑色の稻穂も、疎らではあるものの黄金色に成りつつある。

俺が婆ちゃんの記憶を消せば、婆ちゃんには野菜と稻を育てる平凡な毎日が戻つてくる。見知らぬ黒い袴を来た五人の男女と、たとえ僅かな時間でも、生活した事を忘れ去る。

「……嫌なもんだな……」

何を躊躇う事がある？記憶を消して、婆ちゃんが氣を失つている間にとつとと「魂界に帰れば良い。それだけ、たつたそれだけの事だ。所詮はただの人間だ。もう一度と会う事も無い。住む世界が違う。格好つけた例え等ではなく。

「悩んでても始まんねーか……」

視線を家の戸へと移し、木で出来たそれを手の甲で叩く。

「婆ちゃん、帰つた」

「どうぞ、入んな」

ノロノロと口を開く。口を開き切ると、伏せていた目をゆっくりと上げる。

一瞬、意味が分からなかつた。

目の前には正座している婆ちゃんと、横たわる婆ちゃん。囲炉裏の前に座る婆ちゃんの胸からは鎖が垂れている。

死んだ……？　婆ちゃんが……？

「ばつ、婆ちゃん！ いつからだ！ ？それ！」

鎖と、まだ眠っているかの様に綺麗な遺体を指差す。  
こちらの慌てよつとは正反対に、婆ちゃんはいつも通りにのんびり答える。

「あなたが帰つて来る少し前さね。……私は、死んだんだろう？」  
婆ちゃんの言葉にゾクリとした。この人は、解つている。

普通の靈なら、こんな直ぐに状況を飲み込め無い。

自分の体が火葬されるのを見てやつと理解する者も居れば、肉親が自分の遺体の前で泣くのを見て同じく泣く者、やり残した事を悔やむ者、死という現実を認められず発狂する者も少なくない。

何と返すのが正解か分からなかつたが、思つまま答える。

「……ああ、そうだ」

「やつぱりね。そうかい」

普段と変わらない様に頷くと、ちらりといちいちを見る。

「あんた達は、一体何者だい？」

こちらの風に单刀直入に言つてくれると、寧ろ助かる。この婆ちゃんに変な気遣いは要らないだろ？

「死神だ」

「やうかい

あつさりとした口調で言われる。そこは深い問題では無いらしい。

「それと」

一回言葉を切つてから言ひ。何と無く最初から言いたかつた言葉。  
「俺は『あんた』じゃなくて、熙漸だ」

不思議そうに首を傾げた後、ふつと微笑む。

「すまないね、熙漸」

「別に謝る事は無えけどなー……」

会話が一段落し、立つたままだったので婆ちゃんの横に胡座をかく。

「……婆ちゃんは家族とかいねえのか？」

「いるよ。孫が一人ね」

「孫、か……何処に住んでんだ？」

「遠い都會さね。こんな田舎じやなくてねえ」

「会いたいか？」

婆ちゃんは驚いた風にこりりを見ると、優しく微笑んだ。俺の言いたい事が分かつたんだろう。

「優しいねえ、熙漸は」

思わず目を伏せる。

「……んな事無えよ。母親の死に田に会えない親不孝もんだ。……  
で、どうなんだ？」

「……嬉しいけど、無理さね。今じゃあ何処に住んどるかも分かりやせん。あつちも私なんかと会いとうなかろつて」

「……そつか

聞きたかった事を全て聞き終え、腰から刀を鞘ごと抜く。  
それを見ても、婆ちゃんは驚きも怯えもしなかつた。変わらず、正

座のまん。

「今から行くとは色々大変だろ？けど、俺が絶対に会って行く。のんびり待つてくれ」

俺の放つ言葉を、婆ちゃんは相変わらずの笑顔で聞いていた。その表情を見て、寧ろこちらが安心する。

「あと、婆ちゃんの野菜は出来るだけ俺が育ててみる。上手くいくか分かんねーけど」

「頑張んな」

「ああ！」

婆ちゃんの笑顔に答える様に笑つて頷く。

「……婆ちゃんなら死神に成れるかもしんねーな……」

「?何か言つたかい？」

「いや、独り言」

言い終えると胡座を崩し、婆ちゃんの正面に立つ。

「それじゃ、一旦お別れだ。元気で」

「あなたも体調管理気をつけな」

「婆ちゃんもな」

刀の柄尻を婆ちゃんの額の前に合わせると、婆ちゃんは皿を開じた。死の直後とは思えない穏やかな笑顔。

「ありがとな」

## 最終話 隊舎内での後始末

十番隊隊舎・隊首室

「すついませーん！」

俺と勝里は頭を下げている。いや、下げるせられている。頭に乗せられた手により強制的に。

「ほら！こんなに謝つてんですかー！」

「……なんでお前は弁解しねーんだ」

冷ややかな声が発せられるが、それを気にした風もなく高い声は続ける。

「……なんで俺らは頭下げてんだ？」

頭の上に手が乗せられている勝里が人一人を挟んで俺の方を向き、不満の塊のような顔で尋ねる。

「んなもん知らねーよ…ホオツ！？」

突然力の込められた手に因り、更に頭が下がる。首がグキッと鳴つたが、不可抗力だ。

「（）愁傷様」

壁にもたれながら霧穂が言った。それを聞き勝里が思わず状況を忘れて言い返そうとしたが、再び力の込められた手に顔をしかめ黙る。

「霧穂はなんで“（）”なってねーんだよ？」

勝里の代わりに、右手の指で自分の頭を指して聞く。

「私もこいつてり搾られたわよ。でも責任は私の上官に……ほら……ねえ？」

最後の方は言葉が小さくなつていつたが、ギリギリ聞き取れた。

その答えに、自然と溜め息が零れる。

数分前

「あー、楽しかつたな！」

「楽しいかよ、バーカ」

言葉とは裏腹に熙漸の表情は穏やかだ。微笑みさえ見える。

此処は三番隊隊舎の屋根。書類をひとつと片付けた熙漸は勝里と並んで寝転り、夜空を見ていた。

勝里が90。転がり、熙漸の方を向いて頬杖をつく。

「けど良かつたじゃねえか。婆さん、無事にこっちに着いたんだろ？」

「なんもん分かるかよ。明日になつたら靈圧探つてみるわ。で、お前は？」

「何が？」

「お前は上に何も言われなかつたのか、って。勝手に現世に来ただろ？」

「あー、それねー」

「ごろごろと向こうへ転がつて行きながら勝里が答える。

「そんな厳罰は無かつたぜ。少ーし注意されただけだ。それに……言いながら、勝里は転がる方向を真逆に転換する。

「書類より実戦の方が楽しいだろ？」

「そりやそうだな」

「勝里！熙漸！」

屋根の下から霧穂の声が聞こえる。面倒臭いので動かずに居ると、ヒラリと上に上って来た。

「今無視したでしょ？」

「してねーよ

「で、何の用だ？」

この二人に任せておくと会話が進展する気配が無いので俺が尋ねる。それを聞くと、なぜか霧穂は複雑そうな顔をした。

「あー……私に免じて、ちょっと付き合つて

「はあ？」

で、これだ。

訳が解らん。

「この子らの為に現世に行つたんですよ、私は！」

この隊舎の長にして冷ややかな声の主、十番隊隊長日番谷冬獅郎が大きく溜め息をつく。

「もういい、時間の無駄だ」

その台詞を聞いて、熙漸と勝里の頭を押さえていた張本人、乱菊が目を輝かせる。

「たーいちょーうーありがとうございまーす！」

「それと、そいつらの頭放してやれ。首傷めそつだ

「あ

自分が一人を押さえ付けていた事をすっかり忘れていたらしく、慌てて手を放す。

二人の頭に加えられていた力が消え、久しぶりに地と直角に立つ。

「あ、ありがとうございます……？」

考えてみれば礼を言う道理が元々無いのだが、何も言わない訳にもいかないだろ？」

横を見ると、勝里は首を回しながら顔をしかめている。

「ボサツとすんな、とつとと職務に取り掛かれ  
ザツと踵を返し、日番谷隊長が机へと向き直る。

初めて間近で見る隊首羽織の十の字に目を奪われながらも、礼をして下がる。

「ホラ、隊長は心が広いでしきう？」

なぜか“してやつたり”的表情を浮かべる乱菊が一人に意見を求める。

普通なら、本人の手前『はい』が正解なのだろうが、この場合は『はい』でも『いいえ』でも失礼になる気がする。

「は、はあ……」

曖昧に答えながら勝里の方を見ると、俺を完全に無視して霧穂と話しこんでいた。……舐めてんのか？

「あ！霧穂～！最後に入った店に書いてたんだけど、来週に可愛いアクセサリーの特売があるのよー行くでしきう？」

ピタリと日番谷隊長の足が止まる。

霧穂がバツが悪そうに答える。

「……は、はい……」

いつの間にか俺と勝里は襟を霧穂に掴まれていた。

「霧穂？」

「行くわよ」

「は？」

三人の姿がその場から消えた瞬間、十番隊隊舎に怒鳴り声が響いた。

「まーつーもーとオー！…」

### 三番隊隊舎・屋根

俺は足を投げ出し、両手を後ろに着いた。勝里はいつもながら寝転がり、霧穂は足を崩して座っていた。

「……お前、よくあんなところで仕事出来るな」

勝里が真顔で感心していると、霧穂がのんびりと言った。

「もう慣れたわよ」

「そんなもんか」

「で、熙漸はどうすんの？ あのお婆ちゃん」「だあーかーらー、明日になつたら探すつてば。勝里にわかつ言つたつての」

「なんで私にキレんのよ？」

霧穂が口を尖らせると、あつさつと言葉を返す。

「八つ当たり」

「自分で分かつていや世話を無えなー」

勝里が仰向けになりながらダラダラと言つ。

「全く……お前はダラけ過ぎだ。自分の家か」

頭の下で腕を組んで寝転がる勝里を見て呆れる。

「大体自分の隊舎ですら無えーじやねえか。いつその事ウチに入るか？」

「三番隊に入つたらお前の下で働くねえといけねえじやねえか。真っ平じめんだつづーの」

「はーつ、 そうかい」

勝里に倣つて俺も寝転がる。瓦の寝心地は決して良いとは言い難かつたが、背に感じる凹凸が妙に心地良い。

横になつた途端に、眠気が襲つてくる。

「あー、俺此処で寝ちまうかも」

「おいおい、貴族がこんなとこで寝んのか?」

勝里が茶化すが、もう言い返す気力も無かつた。

「あ、 そうだ」

肝心な事を言い忘れていた。

こいつらが居なけりや、俺はとうの昔に死んでいた。

怪訝そうな顔をする一人に、一言だけ言う。

「ありがとよ」

「どういたしまして」

「やけに素直だな。 風邪か?」

「ははつ、かもな」

視界が急速に狭まり、勝里と霧穂の談笑がぼやけていく。

晴れ渡つた夜空。

閉じてゆく灯峰熙漸の田に、最後に映つたのはそれだつた。

## 最終話 隊舎内の後始末（後書き）

ども。ヴォックスです。こんな駄文にここまで付き合って下せりて  
ありがとうございます。えー……言葉が見つからないのでこの辺で。  
機会があれば、また。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1167f/>

---

The Cream ~BLEACH~

2010年10月10日01時41分発行